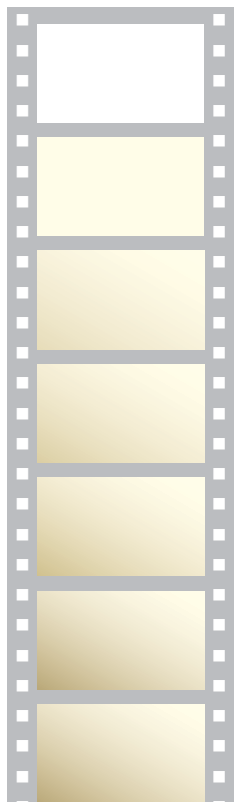
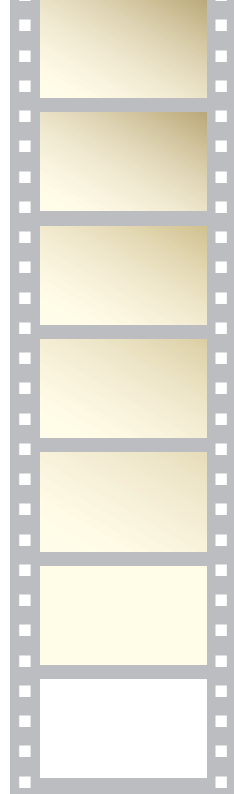


伸^ノさんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第六十一回 「アナウンサーへの道」①

楽しかった大学生生活



ぼくらビートルズ世代

口を開けているのが筆者
映画部K君（故人）と近くの公園で

今から思えば、大学生活は最高に楽しい四年間でした。その半分は「クラブ活動」に、また他の半分はアルバイトなど、実社会へ出る予行演習のようなもので、戻れるならもう一度体験したい生活です。

ぼくの場合、父の転勤でそのまま家族一緒に転居しましたから、大学を卒業するまで一度も一人暮らしをすることがありませんでした。炊事、洗濯、掃除など、すべて母がやってくれたので、下宿暮らしをして頑張っている友達のことを考えると、とても楽しい生活でした。

大学二年の秋、「アナウンサー」という職種に挑戦しようという準備を始めましたが、先輩のO^オさんやAR^{アラ}さんの話だけでは情報不足だと判断し、四年生になる前の春休みを利用して、北は札幌

(叔父の知人が多くいたことと、放送局の本社が札幌にあったこと)、南は名古屋(高校2年生まで住んでいたこと)まで、日本列島を北ルートと南ルートに分け、放送局めぐりをしました。

つまり、自分が住んで来た、また住んでいた場所を逆に回って、地方の各放送局はどんな所か見聞を広めようとしたのです。そして、放送局の人事部に来年度の採用予定を聞き、試験があれば連絡をもらえるよう、お願いをして回りました。

また、情報が集中する東京のアナウンス学校の春期講習を受け、問い合わせの窓口顔つなぎをして、万全の捜査網を張ったつもりでした。

東京のアナウンス学校の講習は、当時の民間放送現役の男性アナウンサーが担当した格調の高いもので、NHKのパターンとは違い講習時間の終わりに、そのテーマに合った「ダジャレ」で話を閉めるという、まるで落語ラクゴのような授業でした。

ある日、ダジャレを言った男性アナウンサーの反応に、教室でぼくを含め三人だけが声を出して笑いました。他の二十名ほどの生徒は何も反応しませんでした。するとその男性アナウンサーが、自分の「ダジャレ」を他の生徒に理解してもらえな

